

十神山



会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会

〒692-0064
島根県安来市古川町534
TEL 0854-28-9988
FAX 0854-28-9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com

新名人に聞く

安来節と私



唄名人
上代安夫
(松江支部)

祖父の代からあったと思われ、昔の蓄音機で、正月や祭り等のお客様のもてなしに父が安来節、浪曲等を聞いていた時、まだ小学生頃の私や兄弟も側で聞いていたので安来節のフシが頭にしみ込んでいたと思う。

昭和二十六年、私が十八才の頃、現大東支部の前身、幡屋安来節愛好会が出来た。二十二年の兄(茂則)も若手の会員でした。当時各家で練習されるのを聞いたり、兄に話を聞いたりしていたので、若い私なりに多少は知識が芽生えていたと思う。

二十代前半の頃に私もレコードを買って、安来節に出雲追分とか米山入りの唄に聞き惚れていた。職場の宴会ではその聞き覚えの唄を得意になって唄っていた。それでもまだ若者の遊びに熱中していた年代、私が安来節を正式に習い始めたのが昭和三十六年十二月、二十八才の時、我流の唄で間ハズレする私に三代目富田徳之助師匠が「今までの唄は全部忘れなさい」と言われ、初歩からやり直しさせられた。私は安来節を始め

らためて名人の重さと責任の重大さを感じました。私は思いますが、名人は最高位ですが唄に頂点はなく、その見えないし届かない頂点に少しでも近づけるようにに勤め、名人として恥じぬよう一年でも、一日でも長く唄い続けたいと思います。私がなんにつけて頼りにしていた兄は今、唄えなくなりました。さぞ無念であろうと思います。その兄の分まで頑張りたい、頑張らなくてはならないと思います。

プロフィール

保存会役職

資格審査員

入会年月日

昭和三十六年十二月

活動記録

昭和三十七年四月

第一回新人コンクール出場

二位入賞

昭和三十八年四月

第二回新人コンクール出場

優勝

昭和三十九年三月

NHKのご自慢

民謡の部

安来節で島根県代表

昭和四十五年

大阪での日本万国博に出演

優勝大会での優勝歴

個人の部

昭和四十年・四十二年・四十四年・四十五年

団体の部

昭和三十九年・四十年・四十二年・四十三年・四十四年・四十七年

京へのぼった鰻

安来節が育った自由闊達な風土

時は江戸時代の鰻にまつわる知恵と技と商魂逞しい安来の町の商人の物語である。出雲地方の鰻といえ、宍道湖七珍(スズキ・モロゲエビ・アマサギ・シラウオ・コイ・シジミ・ウナギ)の一つとして珍重されているが、宍道湖から大橋川を下って広がる中海でも、かつては美味な鰻が捕れたものである。松江藩主らが参勤交代で江戸へ向かった、いわゆる出雲街道を、中海の鰻を大阪や京都へ生きたまま運んだ商人がいた。今を遡ること二五〇年前「うなぎ屋」と称する初代松本佐右衛門は、若い頃から中海での漁業や魚類の販売業を営んでいた。たまたま宝暦六年(一七五六年)のこと、中海で鰻の豊漁が続いた。当時、安来地方では生きた鰻は海に放し、死んだのを庶民が食べる習慣であった。この鰻の大漁に着目した佐右衛門は、まず松江藩に申し出て中海の鰻を藩の特産物として大阪で売り出せば、必ず松江藩が潤うと説得して、藩の許可と運搬する道中の証明書を受け取ることに成功した。彼は早速生きた鰻を大阪へ持つて行き、有名な料亭へ売り込むと共に、将来の取引を約束させたのである。彼はその勢いで京都へ赴き、運搬途中の安全を確保するために、朝廷と深い関わりのある聖護院宮に生きた鰻を献上して、御用商人に取り立ててもらい、道中の番所通行用の



聖護院宮から賜わった「御用提灯」(中央)と菊花紋の小旗(右)
—安来市、松本佐重氏所蔵—

小旗と提灯を賜ったのである。小旗には中央に菊花紋、右肩には聖護院宮の染抜きがあり、提灯の表には「御用」、裏面には菊花紋が墨書してある。これを携えておれば道中の番所で引き止められることもなく、安心して堂々と通行できたのである。これは生きた鰻を京阪の料亭に届けるため、京へのぼった鰻の道が実現したのである。

並河健蔵

とこで鰻を生きたままこの長い道程を運ぶには、まず漁獲後一週間は飼ひ締めて腹をすかせた後、海藻を敷いた竹籠に詰めこんで、菅笠の夫婦二、三十人の編成で天秤棒の前後に担いで出発した。夜半に安来を発ち隣の鳥取県の法勝寺、根雨そして難所の四曲峠を越えて、岡山県の勝山の宿に着く。途中、所々で籠を川や池につけて、鰻に生氣を与え、その間、一行は昼寝して長旅に備えたという。勝山からは旭川を舟で岡山へ下り、瀬戸内海を経て五日目に漸く大阪に到着して、道頓堀や淀屋橋の料亭に活き魚として届け、翌日には京都にも運んだ。厳しい行程である。明治時代に入ると輸送方法が天秤棒から大八車に代り、さらに明治後半には境港から舞鶴へ航海する阪鶴丸が利用され、明治四十一年に安来駅が完成すると貨車輸送が可能となった。昭和時代になると全国的に人工養殖が盛んとなり、中海の鰻漁も極度に減少して、「うなぎの道」は終焉を告げるようになった。

うなぎ屋の八代当主・松本佐重氏の話によると、最も儲かったのは、幕末から明治初期の頃で、時あたかも激動の時期であり、上洛する多くの志士たちが、鰻料理で精気を養いながら維新の秘策を練ったことであろう。当時、頻りに鰻を運搬した一行には頑健な若者が雇われ、賃金は普通の四倍にあたる高給であったという。また一行は勝山まで急いで運び大阪方の運び手に渡した後、安来に戻ってくる。二日は疲れて寝込んだという。また興味深く思ったのは、藩の許可を受けて鰻を運んだ人たちは、大阪や京都さらには道中で知り得た維新に関わる多くの情報を、その都度、藩に報告したことである。松江藩にとって維新前後の生々しい情報を得ることが何よりも重要なことであった。

江戸時代に京阪へのぼる鰻の道を開いた、鋭い才覚と逞しい商魂をもった松本佐右衛門という商人が安来の町にいたのである。

私と安来節



唄 准名人 山根信重
(斐川支部)



なつて仕方ありませんでした。その年は出雲追分の斐川支部を設立し、会員の皆様には大変迷惑をかけました。

仕事はバスの運転手で路線も觀光も乗務し、会社を退職してからは約五年ほど町の保育園のバスを運転し、子供達と唄ったり、三味線や鼓をさわらせたり、竹馬・銭太鼓作りやモチつきなどをやり若返った気持ちでした。

この度、私事栄えある安来節唄 准名人に推挙されこの榮譽に對し身の引き締まる思いです。

返り見れば昭和四十八年近所の初代斐川支部長 故 荒木耕秋さんに誘われて安来節を始めました。

五十三年には教室が六ヶ所もあり、地方審査会ではお弟子さんが三十八名も受審致しました。五十四年に唄・師範になり絃も初段でその頃はとても忙しい毎日でした。

平成二年には大師範に昇格させて頂き、今思い出すとよく体が続いたなと思います。その頃、娘も少年の部で唄と鼓をやっていて、優勝大会では優勝をして大会終了後の八月十七日の夜には月の輪まつりの仁輪加に出演し、とても嬉しかったです。

平成十年から支部の事務局をやり十四年から支部長をやっております。

平成十年春にガンの病気になり、入院・手術と半年間病院におりましたが、やはり安来節の事が気になります。

最後に会員の皆様の御多幸をお祈りし准名人の名に恥じないよう頑張るつもりですので、今後一層の御指導御鞭撻の程御願ひ致します。



絃 准名人 野坂茂男
(出雲支部)

私が安来節を覚えたのは

小学校四・五年生の頃だったと思いますが、父親が唄好きでよく唄っていました。村一番の声好しで唄い上手と言われていたようで、家には蓄音機があり、よく聞かされていました。手廻しの蓄音機ですから番をさせられてレコードの取り替えをよくしました。

昭和十五・六年頃の事です。大社捨子さんと岡田駒千代さん、福島亀子さん達

が唄っておられ、知らず知らず安来節を聞き覚ええたようです。昔の唄はリズムもテンポも好く身体が自然に踊り出したくなり浮き浮きした事を憶えています。今頃の唄は一寸節を長く唄っているように思います。

(特に二節を)

三味線を始めたのは昭和三十八年頃です。出雲の三味線屋さんが我が家の隣に引越して来られ、紹介して下さったのが二代目お糸さんの妹さんでした。ナミ六さんという元芸者をしておられた方で初めて手習いをしました。不思議な縁だったと思います。それから四・五年後に安来節保存会が出雲にもある事を聞き、入会

させてもらい、三味線は野坂師匠の門下生になりました。

また私は安来拳もやっています。御存知の方もおられると思いますが、安来節とは切っても切れない文化だと思っています。平成元年より地元公民館で続けており、ぜひ皆様も打ってみて下さい。(安来拳は打つといいますがジャンケンと一緒にです。庄屋は鉄砲に勝ち、鉄砲はキツネに勝ち、キツネは庄屋に勝ちます。続けて二回勝つまで合拳が続ぎ、なかなか勝負がつかずおもしろいものです。 「拳は三拳、勝負は二拳、だれが勝つやうらうら負けるやうらうら」(唄)

「伝承に想う」



米子支部長 清 砂川 三代目
(米子支部)

三代目を襲名して三年目を迎えました。後進指導にあたりルーツの認識が不可欠との観点から掘り下げました。砂川流男踊りの起源は始祖中村千賀次師(米子市寺町に菩提寺あり)が明治の後半から大正、昭和の初期にかけ、当時の男踊りに日本舞踊の所作を随所に取り入れ品格ある踊りを確立。現役時代は民謡社中を組み、座長として元祖日本女大相

撲との二座合同の興行などで全国で活躍された。その芸風を今は亡き初代砂川清師匠が受け継ぎその後二代目、三代目と引き継いで現在に至っている。使命感と師匠に一步でも近づきたい思いから日本舞踊の修行もしました。

次に自分が踊る際に信条として居る事があります。
● リズムに乗り切る。
● 心弾んで踊る。
● 所作は繊細と豪快を組み合わせる事により妙味を醸し出す。
● 笑いの要素を盛り込む。
● 中途半端では感動は生まれない。
次にその流儀を習ったそのままを踊っていたのでは

時代に取残されてしまうので自分流に少しずつその時代に進化させていく必要ありと痛感しています。また最近では特に時間を作って近くの小川に行き、どじょう掬いのイメージ作りと情景を膨らませるように心掛けて居る。これからは創意工夫と真摯な気持。 先人、師匠、先輩、日頃ご協力頂いている会員の皆様への感謝を忘れる事なく後進指導に努力していきたいと存じます。今年が始祖の生誕百二十六年目にあたり申し述べました。終わりに男踊りにも流派があり、それぞれ特色があつて面白いです。皆さん男踊りを楽しみましょう。

出雲の風土、歴史、郷土芸能体験の旅 第2段を企画検討中。情報ご連絡下さい。

安来節保存会 東京支部

事務局

東京都新宿区西新宿7-7-7
ハイライフ西新宿316号
TEL 03・3361・0488 FAX 03・3361・4293

正調安来節 銭太鼓教室

- ◆ 第1・第3水曜日 1時～
 - ◆ 月謝・月2回けいこ 5,000円
 - ◆ 入会金 3,000円
 - ◆ 安来節保存会関東支部 浅草道場 (浅草雷門くぐり左折徒歩30秒)
- 〒111-0032 東京都台東区浅草1丁目18-3
TEL・FAX 03-3847-0215



正調安来節 銭太鼓・製作・販売 3,500円(送料別) Tel・fax 048-296-1328

関東一円に出張けいこもいたします。

初心者大歓迎

正調安来節 銭太鼓 師範 阿部洋二

新支部 発進!



東海支部長
桂 俊弘

昨年十月東海島根県人会内に事務局を置き、東海地区にはじめて安来節保存会の支部を発足することが出来ました。

私も島根県出身であるため同郷の中村瑞子さんから故郷の民謡安来節を東海に広めたいとの熱い思いをお聞きし、支部長をお引き受け致しました。月に一回東海島根県人会主催の合同稽古を開催しており唄・絃・鼓・錢太鼓は中村瑞子さんを、また男踊りは一宇川俊栄さんを講師に招き、毎回皆楽しくお稽古しております。

少しずつ会員も増えて、現在会員数は五十名を超えました。三月には初めての審査会も実施させて頂いております。発足したばかりで新人ばかりの支部ですが、これから研鑽して参ります。そして「芸どころ」と言われまます名古屋を中心に、今後益々会員を増やし安来節の普及と発展に努力して参りたいと存じますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ひびけ歌声世界の空へ

支部情報

安来節



三階支部長
大屋久美子

旭町から浜田へ転勤の亡夫と共に、浜田の住民となった時、妹から浜田に安来節教室が出来ているから「週に一度話したり習ったりしない？」という誘いに乗って足を踏み入れた安来節。昭和四十九年に浜田支部設立以来、江津支部・金城支部・芸北支部を設立、その指導に追われながらも唄が師範昇格出来て喜んでおりましたが、昭和五十四年九月より翌年四月末まで入院となりました。

しかし、二代目安達先生各位のあたたかい御指導により絃・鼓も師範昇格しました。そして唄・絃・鼓・錢太鼓・男踊り・女踊りに各種民謡の唄・踊等を織りまぜて各種施設への慰問や年末チャリティ出演も毎年参加し好評を得ております。

昨年は念願の三階支部十周年記念行事も、二代目安達先生並びに近隣支部長様各位にも御出席賜わり、種々演芸も御披露頂き、盛大に挙行出来ました事は、本部諸先生方の御指導並びに近隣支部長様各位の御支援の賜です。

また、この三階支部を支えて下さる会員の方々の温かい御協力により、めでたく次へのステップを踏み出すことが出来ました。これも偏に安来節の魅力にひかれた者同志手を取り合い、今日からまたこの輪を更に大きく広げてゆきたいと念願し、努力を続けております。



石見支部長
野坂 英明

安来節保存会の発足について、今静かに振り返って見る時、支部設立にあたって、故二代目出雲愛之助先生御一行を向え、盛大に開催されたのも懐かしく思う今頃です。

その当時、安来節保存会の支部は十三支部が本部道場を中心に活動していました。石見地方では益田支部につぐ十四番目の安来節保存会支部として発足しました。

三味線の伴奏もなく、がらんとした部屋にみんなで正座して輪になり、腿を叩いてテンポをとりました。いつしか太腿は赤紫に腫れ、そんな事がいつまで続いたのだろうか。審査日の前夜ともなれば、保存会本部より来られた三味線の先生に合わせ

て輪を一周するのに夜中の一時を過ぎることもしばしば、今思えば四十年の歳月を振り返って昔をしのぶ今日です。

石見支部の設立にあたり故二代目出雲愛之助先生をはじめ、益田支部の御支援により今ある事に深く感謝している所です。

御尽力頂いた諸先輩の方々も今はほとんど亡く、今我々会員がなし得る事は、共に若い世代へと受継いで頂き、安来節保存会の普及・発展に寄与する事が、今は亡き諸先輩の方々への御恩返しと思っております。

発足当時は家を一軒一軒廻って会員の募集に夜遅くまで歩いた事を思い出します。今一度、初心に帰って会員相互の融和といつまでも若々しく楽しい会であってほしいものと念じています。

ほど良い緊張感と達成感、これが安来節の本體だとするならば一人でも多くの人々に味わってもらいたいと思います。

平成十九年度 唄い初め会

支部競演成績表

安来市長賞	松江支部
安来市議会議長賞	神門支部
安来市観光協会賞	本部道場
安来商工会議所会頭賞	関西支部
山陰放送賞	大東支部
足立美術館賞	加茂支部
家納喜賞	尾高支部
安来節演芸館賞	仁多支部

安来節全国優勝大会

記録ビデオのご注文は!!

1991年~2006年の毎年3日間の競演

高品質な映像観
迫力の音質

- あの興奮をもう一度...! 毎年8月に行われる安来節全国優勝大会の記録ビデオです。あなたの晴れ舞台、映っています。
- 唄や踊りの手本に最適です。
- 錢太鼓デモンストラーションバージョンもあります。

各¥5,500 (送料込み) 放送用カメラで撮影

ご注文お問い合わせ

中四国映像製作社連盟加盟

ヴィエルシー株式会社



〒690-0012松江市古志原2-9-60
TEL (0852) 27-7700
FAX (0852) 26-8132
E-mail vlcn@viola.ocn.ne.jp

大小鼓製造卸販売



杉本 鼓 店

住 所：島根県松江市馬潟町360-13
電話・FAX：0852-37-2033
E-mail：ks36013@web-sanin.co.jp

※通信販売も致しますので、お気軽にお電話ください。修理、下取りもご相談ください。

会員の声コーナー

支部だより



本部道場
渡部 弘 充

本部道場の設立は、明治四十四年安来節保存会創設と同時期である。本年は九十六年目にあたります。安来節保存会の膝元という事で、唄い初め会やお糸まつり、最大行事の全国優勝大会の三大行事の他、師範の部資格審査会のスタッフとして協力し、保存会運営の一役を担っています。

さて安来節の発進拠点とも云える、安来節演芸館が開館して一周年を迎えました。記念のイベントが種々開催され、一層の賑わいを見せています。本部道場からも多数の出演がなされています。一年を振り返って、お客様のアンケートの中から、本場の安来節を間近で観られ感動された感想やもっと聴きたい時間が短いという意見、また技術的な面に対し

て厳しい意見もあったようでありませぬ。保存会の活動の中では経験出来ないまた味わう事が出来ないものが舞台演芸にはあります。

そこで本部道場では通常の活動では修得できない小太鼓の打ち方(銭太鼓、どじょうすくい)や拍子木の打ち方(どじょうすくい)の研修に取り組みました。太鼓では基本的に右で始め右で終るバチさばきで、二つ打ち：六つ打ち等の繰り返し練習。拍子木はテンポよく、正間・裏間が逆にならないように打つ練習と続き、最後は三味線、唄に合わせる研修を行いました。また女性の出演者有志で照明に映えるメイクの要領を、安来節演芸館で公演中の日光江戸村劇団の座長を講師に迎えて研修を行いました。

安来節演芸館に御来館下さるお客様は、プロの芸術として観て下さいます。お客様の満足度が、より一層向上するように研鑽を積んで参りたいと思っております。

本部道場の資格審査会は五月四日(五日に予定されています。一月十四日には五部門での研修会、二月二十三日には本会の指導部を講師に迎



えて銭太鼓の研修会を開催しました。全員昇格を目指して一層の技術向上に向けて、日々邁進中でありませぬ。

支部長交代の跡を 振り返りまして



米子中支部
井川 一 郎

私と安来節の出会い、最初友人の薦めで始めまして安来節を数十年続けられるとは夢にも思いませんでした。やればやるほど奥が深く難しく、また不思議な人を引き付ける力がある様に思われてなりません。それだけに魅力があり続けられたのか

も知れません。

遠く明治の時代から唄い継がれて一〇〇年の歴史ある安来節が今日まで進化を続けているように思います。この安来節を編み出された、元祖家元先生は偉大でまさに神様のようにならぬと成りませぬ。高齢化社会の現代ですが何時までも若々しくいられますのも安来節のお陰と言います。まして過言ではないと思えます。

例えば平成十四年、前支部長から引継ぎまして、僅か五年間ではありましたが、手探り状態で初年度から立



続けに次々と行事をこなして来る事が出来たのも当支部会員の皆様方の暖かいご理解とご協力があってこそ担って来る事が出来た。あれこれと考えている内に一瞬の内の五年間でございました。しかし健康上の理由もありまして、支部長を交代させて頂く事になりました。途中、休会を七、八年挟みまして、永年保存会員として続けさせて頂きまして支部長という大役を任せられた事は人生最大の経験をさせて頂きました。当支部は元より各支部の皆様、保存会全員の皆様方に深く感謝申し上げます。今後益々保存会のご繁栄とご発展を心より願って止みませぬ。

出雲の風土・歴史安来節体験の旅



東京支部長
棚橋 保

東京支部十周年行事の第一弾として、総勢二十名で空路米子空港へ飛んだ。そこから三日間専用の日の丸バスをチャーターし出発。まず高山雅市師の踊姿の石像がのっている墓前に参拝、続いて出雲大社へ行き「いつもニコニコ福の神」を合唱、ヨリが反対の巨大なシメ縄の上にお賽銭をのせ、それぞれの願い事を祈願する。そして桜満開の玉造温泉へ、夕方竹内松子社中の演芸を堪能する。

二日目、松江特設ステージでの安来節新人コンクールに唄・銭

大鼓・踊とそれぞれ挑戦。参加者のほとんどが初めての体験で感激はひとしおであった。その後皆生温泉に宿を移し、コンクールの緊張もとけ楽しく交流しあう。

昼食はどじょう料理を味わい、自由時間に足立美術館へ行く人もいた。旅の終りは小雨降る中、十神山に登り、山頂で「安来千軒名の出た所社日桜に十神山」を全員で合唱し、全日程が終了した。「こんな楽しい旅行ははじめてだ」と感想を語りあいながら、全員無事帰路についた。



「関東支部創立十周年記念大会」



関東支部長
若 岑 礼

昨年の十一月二十三日十一時より、安来節には由緒の深い浅草の雷ゴロゴロ会館五階大ホールにおいて、関東支部創立十周年記念秋まつり発表会を開催いたしました。

会場には関東地区在住の島根県人会の方々や日本相撲甚句協会の方々、静岡県富士市の団体のの方々、その他一般のお客様方で満席の盛会となり、会員一同は各種目ごとに日頃の練習の成果を大いに発揮して頑張りました。

午後二時からゲストとお楽しみコーナーの部で、安来節保存会の国錦耕次郎先生をお招きいたしました。まず寿獅子舞から始まり、次は孫と一緒にどじょう掬い二人踊り、それから有川鯨踊り、鍋ぶた踊り、越中おわら案山子踊り、江戸神楽ひょっここ舞い、出世太鼓、安来節銭太鼓の早打ちと続き、唄では広島木遣音頭、秋田馬子唄、江差追分一本通し、筑波山唄、長崎ぶらぶら節、野州木挽唄、大師範の明けの鐘、次には原先生に猫殿と秋田船方節、その後若岑佳声が十三代目横綱、島根県出身陣幕久五郎の記念興行の際に唄われた島根県名所の唄を唄い、おはやし「安来節 安来節」を会場の皆さ

んと共に合唄いたしました。最後には模範演技として原先生にどじょう掬い踊りを踊って頂き、和やかな雰囲気となりました。



安来節保存会関東支部創立十周年記念大会